

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号

※ 甲 第

号

氏

名

朴 景淑

論文題目

造語要素「不・無・非・未」の機能  
——日中、日韓との対照研究を視野に入れて——

論文審査担当者

主査 名古屋大学教授 齋藤 文俊

委員 名古屋大学教授 飯田 祐子

委員 名古屋大学教授 釘貫 亨

委員 名古屋大学准教授 宮地 朝子

# 論文審査の結果の要旨

## 【本論文の概要】

本研究は、日本語における否定の造語要素「不・無・非・未」の造語機能と意味機能についての考察であり、さらに日本語と中国語、日本語と韓国語における「不・無・非・未」の類似点と相違点を明らかにしたものである。

本論文は、日本語の「不・無・非・未」の造語機能と意味機能について論じた第Ⅰ部（第二章～第七章）、日中・日韓の対照研究を行った第Ⅱ部（第八章・第九章）、そして、研究の目的、研究意義、先行研究等を記した第一章と、結論と今後の課題をまとめた第十章によって構成される。

第Ⅰ部第二章においては、「不」と「非」の２字結合語（不／非＋１字漢語）と３字結合語（不／非＋２字漢語）をそれぞれ意味により分類して、「不」と「非」の相違を明らかにするとともに、さらに「不」と「非」の３字結合語の意味機能と造語機能について通時的な考察を加えている。第三章では、「無」の３字結合語について「無」に接続する「下接語」と「無」が接続した状態の「結合語」の品詞性、また、下接語の意味と品詞転換機能との関連性について分析を行い、「無」の造語機能について通時的な考察を行った。第四章は、「未」の造語機能と意味機能についての考察である。第五章では、「不・無・非・未」の結合語が程度副詞の「とても」と「すこし」に後接する用例を朝日新聞を資料として収集し、それをもとに「不」・「無」・「非」・「未」各語の特徴について考察する。第六章では、「非」が「不」・「無」・「未」に比して、接尾語「的」との二次結合が多い事に着目し、「非〇〇的」の成立過程について考察を行うとともに、「不衛生／非衛生的」「不合理／非合理的」「不経済／非経済的」など後続の語に同形の２字漢語が見られる場合の「不」と「非」の相違について論じている。第七章では、「不・無・非・未」が実際にどのように選択されて使用されているのかという「優先選択の規則性」について、「不・無・非・未」の下接語と結合語の品詞性、結合語の接続形態及び否定の意味の相互作用などを分析することにより明らかにしている。

第Ⅱ部第八章では、日本語と中国語の「不・無・非・未」の同形結合語が、中国語へ直訳可能かどうかを分析することにより、日中同形結合語が中国語において直訳できないのは日中「不・無・非・未」の下接語の品詞に制約があることを指摘するなど、日中両言語の「不・無・非・未」の類似点と相違点を考察する。第九章では、日韓両言語の類似点である品詞転換機能に着目し、「不・無・非・未」それぞれについて、下接語と結合語の品詞性という点から詳細な対照研究を行っている。その結果として、日本語の「不・無・非・未」の下接語が動名詞の場合には、その結合語は動詞性を失うという特徴を持つのに対し、韓国語の「不・無・非・未」の下接語が動名詞の場合は、多くの語が動詞性を保有していること、また、韓国語の「不・無・非・未」の結合語が状態性のみならず、動詞性も表せることなど、日本語と韓国語における用法の相違を明らかにしている。

## 論文審査の結果の要旨

### 【本論文の評価】

否定の造語要素として使用される「不・無・非・未」については、その相違をわかりやすく示すことは難しく、実際の文章にも、「不合理」「非合理」などの例が見られる。本論文は、コーパス等により収集された実際の用例をもとに、「不・無・非・未」各語の造語機能と意味機能、そして下接する漢語と、結合した後の「結合語」との品詞転換機能に焦点をあてて、「不・無・非・未」各語の相違を論じたものである。

本論文の評価される点としては、以下の三点にまとめられる。まず、第一点は、「不・無・非・未」の下接語を漢語に絞ったことである。結合前の漢語を「名詞」「動名詞」「形容動詞性名詞」に分類した上で、「不・無・非・未」と結合した後の「結合語」の品詞性を検討することにより、それぞれの特徴が明らかになり、それをもとに「的」との結合、また「とても」「すこし」などの程度副詞との共起関係など、新たな課題の解決へと進むことができた。また、漢語を調査することで、第八章における中国語との対照、そして第九章における韓国語との対照研究も可能となった。

第二点は、通時的な考察を行った点である。上代から現代までの用例を広く収集し、歴史的な変遷を精査することで、「不・無・非・未」が日本においてどのように使用されてきたのが明らかになるだけでなく、近代と現代の用例を対照させることにより、近代の用例は、新漢語の増加に伴って臨時的に造られたものが多いなどの点が明らかになった。これは漢語の歴史を研究する上でも重要な成果である。

第三点は、中国語、韓国語との対照研究を行ったことである。本研究の成果は、「不・無・非・未」だけではなく、各言語の否定表現の研究についても寄与するものである。この日本語を中心にした三言語間の対照研究を可能にしたのは、三言語に堪能な申請者の語学力によることはもちろん、前述のように、日本語・中国語・韓国語に共通する「漢語」という語種に着目したことによるものである。

ただ、課題とすべき点も見られた。まず、「不・無・非・未」の下接語について、歴史的な考察を行う際には、漢語だけでなく、和語についての言及もほしいところである。和語との結合状況を明らかにすることにより、韓国語との対照研究においても、和語と漢語、固有語と漢字語という点からの整理も可能になったと思われる。また、通時的な考察にあたっては、近代における、西洋文化との接触の中で大量に造られた「不・無・非・未」を付した新漢語が、日本・中国・韓国間の相互交流の中で、どのように変化したのかという点、さらには、古典中国語（漢文）からの影響関係に触れていないのも残念である。しかし、これらの点は、いずれも今後への研究課題であり、発展的課題の提起を果たしたという点でも、本論文の価値が損なわれるものではない。

以上により、審査委員は全員一致して、本論文が博士（文学）の学位を授与するのにふさわしいものと判断した。